甘

作者さんや読み手さんの声は
http://www.columnland.net/　にてどうぞ

別にうらやましくなんか・・・

こんにちは僕はマシュマロです。
3月14日って何の日か知っていますか？
そうです。ホワイトデーです。
ホワイトデーってもともと日本で考案されたものなんです。
バレンタインデーのお返しをする日ですね。
しかも、僕らマシュマロを贈る日として福岡のお菓子企業が考え出したらしいです。
とてもうれしいです。

しかし、いつの間にかクッキーや飴に贈り物の主役を乗っ取られました。
企業の戦略が甘かったんでしょうか？
確かにクッキーや飴の方が形や色の種類が多くていいのかもしれませんね。

僕はマシュマロ以上にも以下にもなれません。
でも僕はそれでいいと思っています。

チョコレートのように形を自由に変えることができたり
クッキーのように家で作ることもできません。

でも僕は、形を変えられたりしてまでも食べられたくはありませんね。
ありのままの僕で十分です。

あ、今度のホワイトデーはよろしく。
男性諸君に一応、言っておきます。

以上、マシュマロの独り言でした。

失恋してから1年。俺は学校生活で初めて甘い夢を見ることができたのであった。

苦さの中に

１年前。失恋というより片思いで終わってしまったと言った方が正確な表現だろう。失恋の顛末というのも実に滑稽なものだった。友人の口車に乗せられつい俺が思いを寄せている人の名前を言ってしまった。それから俺の片思いの噂はあっという間にあちらこちら広まりさんざんにはやされた。挙げ句の果ては俺が思いを寄せていることを彼女に知られてしまい、知ったと同時にふられてしまった。俺が思いを直接伝える前に。

まあ、こんな情けない俺に彼女ができる訳がない。

当然と言えば当然の結果だった。まあ甘い夢なんて世の中には滅多にない。甘い夢を求めた俺が馬鹿だった。それに、彼女の性格は悪いと評判を聞く。そう考えると彼女にふられてある意味よかったのかもしれない。

俺の情けない人間性は恋愛に限っての話ではない。普通の学校生活においても底辺を行く人間だった。挙動不審な俺は周りから除外されて、奴隷扱い。もちろん人権なんてものは存在しない。除外された奴らの中には、奴隷扱いに嫌気がさして、不登校になったり他の学校に転校する奴もいた。

俺は奴隷扱いになんとか耐えた。明日への希望は存在しない。例えるならば暗闇の中でももがき、倒れ、そして起き上がるのサイクルの繰り返しだった。学校生活の底辺に甘い夢はほぼ存在しない。

だが、甘い夢がない訳ではなかった。

それは失恋してから１年後の出来事だった。この日も俺は「健康で文化的な最低限度の生活を営む権利」など存在せず奴隷として生きた。この日は１５対１での殴り合いになりぼこぼこになった。殴られて痛いというより暴力の応酬で疲れた。精神的にも肉体的にも。こんなことがほぼ毎日つづいたので学校に行くのにも嫌気がさした。明日の希望は何処にあるのか？　そんな絶望感に打ちひしがれて帰宅しようとした時だった。俺を呼ぶ声が聞こえた。彼女だった。

「バイバイ！」

それは優しく友達に語りかける口調だった。俺は片手を上げて

「じゃあ」

と言って別れた。いつも俺に対して口を聞かない彼女がさよならの挨拶をしてくれたのだ。しかも、かなり甘い口調で！　彼女に対してたいして口を聞くことのできなかったこの俺がこんな甘い夢を見られるなんて！　しかも、精神的にへこんでいる時に声をかけてくれたのでなおさらだった。

確かにこれは危険な恋だった。彼女にこき使われた果てに捨てられる可能性があった。だが、そんなのどうでもよかった。ただ、彼女の甘い言葉を聞くだけでよかった。

これが学校生活で唯一の甘い経験だった。その後彼女と交わした言葉は全くない。

西印度諸島視察記

潮の香りに混じって、むせ返るようなさとうきびの甘ったるい匂いが鼻腔の中に充満する。紺一色の海と灰色の雲の波をかき分けて眼前に迫ってくるのは、人工的な緑と剥き出しの茶色の醜悪な斑模様だった。

いや、違う。この異様な印象はかの地を離れる時に感じたことに違いない。私はあすこへ向かうときは、祖国とかけ離れた、あの色鮮やかな南国の風景を楽しんでいたのではなかったろうか？　重大な任を課せられたことへの誇りと、異国情緒に胸を躍らせながら。同じものを見ていても同じようには感じない、ものの見方を決定的に変えるような出来事がある。私はそういう経験をした。

私は農園労働の現地視察のために日本から西印度諸島に派遣された特使であった。世界的に奴隷の解放が宣言されたために各地で労働力が不足している一方、日本では出稼ぎの場を求める声が強まっていた為である。政府公認の移民が実施されたことは未だなく、いわばその下準備として私はかの地に赴いたのだった。

案内役のすてぃーぶんすという英吉利人は常に笑みを絶やさない慇懃な紳士であった。彼とその使用人の黒人に連れられ、私は到着したその日のうちに農園を見て回った。砂糖プランテーションはさとうきびを栽培する大農場と、そのしぼり汁から砂糖やラム酒を精製する工場の両方が一体となったものであり、農業よりむしろ工業に近いものがある。大勢の黒人が広大な農園で、統一的な指揮・監督の下に各々の仕事をこなしていた。すてぃーぶんす氏によると、彼らには食事と寝床だけでなく専用の菜園まで用意されており、日曜市などに菜園の余剰作物や鶏を売りに出かけることもできるという。「ですから、日本の方たちが体一つでここに来ても十分な生活ができるばかりでなく、結構なお金を稼ぐこともできます」というような意味のことを彼は言った。

実際、私はこの段階では、あの自然豊かでありながら高度に近代化された南国の農園にすっかり魅せられてしまっていたのだった。そのため私はすぐにでも日本に帰って、現地の白人がどれだけ親切で、黒人たちがいかに勤勉であるかを伝えるばかりでなく、このような優れた環境で働けることがどれほど日本の益となるかを力説する心積もりであったのだ。

今にして思えばなんと迂闊であったことだろうか。もっと注意深く観察していれば、いや、普通に頭を働かせることさえ出来たのならば、黒人たちの顔に表れた憂いを、白人の態度の裏に隠された不実を、そしてこの地が未だに奴隷農場であることを見抜くことができただろうに。私は熱に浮かされていたのだ。容赦なく照りつける太陽の熱に。そして何より自分自身の内より生じる熱に。それは田舎者根性だった。虚栄心だったのだ。

事件が起きたのは3日目のことだった。ただしそれは穏便に処理され、私が気付いた時にはすでに半ば解決していた。数人の黒奴が脱走を図ったのである。彼らはすぐに捕まり、そして何処かへ連れて行かれた。

農道を歩いていた時、私は背後に金属の擦れるような音を聞いた。見れば6人の黒奴が鎖に繋がれて、覚束ない足取りで行進していた。ひと悶着あったのだろう、瞼は青く腫れあがり、唇や鼻からは血が流れていた。それ自体はよくあることだ。違反者はどこにでもいる。しかし私の目についたのは、彼らを率いていた男だった。男はこの地区の監督官であり、洋服を着て小銃を携えた黒人であった。彼は白人の上官殿に英語で何事かを話し、目いっぱい背筋を伸ばして敬礼をした後、同族に向き直り、にやにやと嘲笑するような性質の悪い眼を向けた。彼は違反者たちを手荒に引っ張り、そして私の方へ歩き出した。彼は初め、私のことを白人だと思ったようだ。幾分緊張した面持ちで、しかし近くに来て私が黄色人種であることを見て取ると、露骨に警戒の色を解き、そしてあの同族に向けたのと同じ眼で私を見たのだった。

背筋が凍る思いであった、そして顔が熱くなった。普通なら怒るべき状況であるが、その時気づいたのだ、すてぃーぶんすやその他の白人の私を見る眼にも、これと同種の侮蔑が込められていたことに。その瞬間、吐き気を催すほど甘いさとうきびの匂いがした。すべての意味が豹変した。いや、初めからこうであった、私は今まで、熱によって生じた蜃気楼を見ていたのだ。

これはあくまで私の個人的な、しかもどちらかといえば恥ずべき部類の体験である。しかしここにはすべての日本人が注目するに値する事実があるように思えてならない。

いたずらに……

寝てた？　ちょっと話したくなっちゃった

高校2年の秋口の勉強合宿の夜。
俺がトイレに行っている間に、友達に携帯電話をいたずらされ、別れた彼女にメールが送られた。
確かに彼女には若干の未練はあったが、お互い分かり合って別れたから、これ以上ぶり返したくはなかった。

あわてていたずらメールであることを知らせようとした。
しかし送信しようとすると止まってしまった。

メール受信。

どうしたの？

変わらないその優しさこもった言葉が胸を締め付けた。
一応いたずらであることを言ってから話を続けた。
学校生活とか、恋愛事情とか、想い出話とか……。

いろいろ話しているうちに0時をまわった。

そろそろ寝るね。　おやすみ❤

不意打ちの❤マークにささやかな笑みを浮かべて、布団にくるまって眠りについた。

5　石井小刀甘い

「それで棒手振の親父もキレたんでさぁ。」

昼過ぎの一膳飯屋は騒がしい。

そんな店内を、より一層騒がしくするのは伊助だった。おみつはあきれながら伊助を見ていた。

おみつの働く桐屋は番屋が近く、岡っ引きの嘉平親分やその下っ引きもしばしば訪れていた。伊助もそんな下っ引きの一人なのだが、少々おしゃべりがすぎる。今も、先日伊助が仲裁した喧嘩の詳細を語っているのだ。

「そっからは取っ組み合いの大喧嘩さね。いやぁ、煮売屋の親父は強かった。なにせあの」

嘉平が入ってきたのはそんなときだった。

「ここにいたか、伊助。今夜の見回りの打ち合わせがあると言っていただろうが。」

「いっけねぇ！　すっかり忘れてやしたっ。」

「さっさとこい！　おみつ、邪魔したな。」

桐屋を出ようとする二人に向かって、おみつは声をかけた。

「もしかして、例の件での見回り？　二人とも気をつけてくださいね。命は大事ですよ。」

いつにもまして嘉平は難しい顔をしていたのだ。

「俺は大丈夫だって。石井小刀甘い。だから絶対死なねぇよ。じゃあな！」

それだけ言うと伊助は笑いながら出ていった。おみつも嘉平も意味がわからなかったが、あまり気にしなかった。嘉平も桐屋を出ていった。

例の件、とは市中を騒がせている盗人のことである。皐月の始めに飯田町の薬問屋に押し込み強盗が入り、番頭から飯炊きまで六人が斬られた。その後も店の大小を問わず、五軒が被害にあっているが、その手口から察するに下手人は一人のようなのだ。顔を見たものは女子供でさえも斬られているため、面相書きが出来ない。町同心は市中の見回りを強化し、この盗人を捕まえようと躍起になっている。その後も夜回りは続いたが、しばらくは何事もなかった。

じっとりとした雨が降った朝、おみつは通りを走る読み売りの声を聞いた。

「榎本屋に強盗が入ったぞぅ！」

「今度は十人近く斬られたそうだ。」

「逃走中に出くわした町人や御用聞きも斬られたらしいぜ。」

おみつは嫌な予感がした。直後、嘉平の下っ引きの一人が飛び込んできた。

「おみっちゃん！　伊助が斬られた！」

番屋では伊助が寝ていた。幸い伊助は一命をとりとめたが、一緒に斬られた町人のほうは手遅れだった。伊助は顔を見てるはずなのだが、ずっと目を覚まさないらしい。時折、

「おみつ・・・。石井・・・小刀・・・甘い。」

とうわ言を口走るのだが、誰もそれが何なのかわからず、揃って頭を抱えているのだ。おみつなら知っているかと、少し期待していた節もあったようだ。

おみつは伊助の言葉が頭から離れなかった。飯を炊きながら、膳を運びながら、おみつはずっと意味を考え続けていた。あれは、私に言っていたんだ。そんな確信が心を占め、日がな一日考えていたのだが、どうしてもわからなかった。そうこうするうちに三日経ち、十日経ち、ひと月が経ったある日、嘉平が尋ねてきた。先日、やっと伊助が目を覚ましたらしい。

「よお、おみつ、迷惑かけたな。伊助が目を覚ましたぞ。」

おみつは安堵した。

「助かったんですね！　よかった・・・。そうだ、これで盗人も捕まえられますね。」

嘉平はちょっと言いにくそうにしていた。

「それなんだがな、昨日捕まったんだ。」

訝しがるおみつを前に、さらに続けた。

「昨晩、信濃屋に押し込みが入ったんだがね、めっぽう腕の立つ用心棒が雇われていて・・・」

あまりにもあっさりと捕まったのだった。

「え、それでは、伊助さんのうわ言は？」

嘉平は頭をかきながら答えた。

「あれはな、今回の件とは全く関係が無ぇんだ。以前、伊助がおみつに言ってただろ。あれはあいつの洒落でな、俺もこないだやっと意味がわかったよ。」

おみつは唖然としていた。

「あれはな、あいつの気持ちの裏返しってだけだ。いいか？　裏返し、だぞ。」

おみつがようやく理解できたころ、桐屋に伊助が入ってきて言い放った。

「おみっちゃん！　石井小刀甘い！

ぶべらっ！」

伊助の顔についた草履の跡は、その後三日は消えなかった。

でぶについて

最近の社会はでぶ狩りをしているかのごとくアンチメタボである。脂肪で死亡する人が多いからだろうけど・・・

ちなみにでぶの語源は出っ張り→でぶでぶ.でっぷり→でぶ、という風にできたらしいが、そんなことは結構どうでもよくて、自分がいま考えていることはどうなったらでぶか？ということである。

自分は駄目なやつのことを無条件にでぶというが、案外その定義は使えるかもしれない。なぜなら体重、体脂肪、ＢＭＩ、などなど、指標になりそうなものはいっぱいあるが実はこいつらはたいして役に立たない。体重やＢＭＩなんて身長や体格でかわるし、体脂肪はまともに測れる機械をみたことがない。

ここで本人の努力できるかどうかに着目したい。この数字は経験則みたいなもだが、体重の５％を２週間で落とし維持できるかどうかででぶを定義してもいいと思う。はっきり言って、痩せられない奴っていうのは基本的に努力ができない。痩せるためには最悪走ればいいし、食事制限でもしっかりしたものを選べばよい。たしかに今痩せたいと思っている人にとってはかなり辛いこともあるが、努力すれば報われるものでもある。だから、甘いお菓子を食べながら楽して痩せたいとかいうやつはドアにでもつっかえてろ！

散々ひどいことを言いましたが、自分はあなたが痩せられることを応援しています。あんまり体重などを気にしすぎて拒食症にはならないでください。それでどんなに痩せても体調管理ができないようではでぶのままです。それではよいダイエットを！

世界一のスイーツ

　西暦2XXX年、第二次世界スイーツ大戦が勃発した。当時国内に幾つもの巨大勢力を抱えていた日本ですら外国勢の圧倒的戦力に惨敗し、現存している勢力は東京随一のパフェ帝国『王様といちご』と名古屋が誇る難攻不落の要塞『マウンテン』のみであった。

　一方、外国勢の中でも一際強力だったのはブラジルであった。驚異的な速さで南米大陸、それに続いて太平洋全域を支配下に収め、ブラジルの魔の手は日本に迫っていたのだった。

　ブラジル・アメリカ停戦協定の後、ブラジルは日本に対して本格的な攻撃を開始した。ブラジルの四大勢力の一つ、黄色い悪魔と呼ばれる『キンジン』は東京において『王様といちご』の最強部隊『キングパフェ』をいとも容易く撃破（完食とも言う）し、僅か三日で東京を陥落させたのだった。

　そして『マウンテン』と『キンジン』の戦いの火蓋は切って落とされた。

「普通の対戦では中立国の審査員が判定を下すという方法を取っているが、今回は戦争！我が国ブラジル式のルール『お互いが五人の審査員を選出し、敵国のスイーツを試食する。そしてより多くの審査員をその味で倒した方を勝利国とする。』に則る！」

「美味しいか美味しくないか、は関係ない……つまり味の破壊力が決め手ということかっ！望むところ！」

先攻・キンジン

　元々ブラジル北東部ではその暑さを凌ぐ食べ物としてキンジンが食べられていた。材料の殆どは砂糖と黄身であり、その劇的な甘さは体温を下げる効果があるという。ただしこの甘さに耐性の無い者は頭痛や味覚の麻痺に襲われて完食する事も難しい、まさに黄色い悪魔である！

「凄い粘性だ、そもそもフォークで切れない！」

「甘過ぎて舌が麻痺してきた！これ以上は……。」

「エ、エチケット袋を……。」

キンジン、三人撃破。

後攻・マウンテン

　マウンテンは一見普通の喫茶店だが、真の姿はその恐怖のメニューにある。氷山と称される巨大かき氷、アイスクリームが溢れているフロート、そして名物の甘口スパゲッティ。この中でも特に強烈なのが『甘口抹茶小倉スパ』である。抹茶を混ぜ込んで緑色に変色した麺に小倉餡と生クリームを大胆にもトッピング。これぞ日本を代表する和洋折衷のスイーツである！

「み、見た目が既に……。」

「何て事だ、キンジンを軽く超えている味！」

「スイーツの癖して妙に脂っこいぞこれ！」

「甘口抹茶小倉スパダブルも存在するだと？」

「か、完食できないっ！」

マウンテン、五人撃破。

　キンジンが敗北した事によって四大勢力の一つを失ったブラジルは急速に失脚した。その一年後、糖尿病等の病気により世界人口の半分を失うという被害を出した第二次世界スイーツ大戦は終結したのだった。

二つの思い出

あの日は私たちにとって忘れられない日でありました。

あの日、伝説と言われていたお菓子の家が国外で発見されたという情報が入ったのであります。この王国の国民は甘いものが格別に好きで、私も例外ではありませんでした。私はすぐに女王のもとへ行き、出動可能な国民達を連れてその場に行くことで許しを請いました。言い忘れましたが、私たちの国は女性たちが司っているのであります。もちろん私も女性で、この国で国民たちの総指揮をやっております。話が横道にそれましたが、私が女王にそのことを言いますと、女王は快く許して下さり、私は皆を集めてすぐに出発しました。

お菓子の家は私の身長の何百倍もありそうな、巨大な薔薇のつぼみの中に隠されていました。その薔薇は白とピンクのグラデーションが非常に美しく、また、花の先端には黄金の帯が巻かれおり、蝶を象ったような黄金の装飾品がついておりました。そして、そこからかすかながらも甘い香りが漂ってきたのです。私たちは気持ちの昂りを抑えることができませんでした。国外は非常に危険ではありましたが、期待で胸がいっぱいでした。私たちがつぼみの中に入ってみると、確かに、そこにはお菓子の家がありました。むしろ、お菓子の城、がふさわしいかもしれません。非常に豪奢なお菓子の家でした。私たちは夢中でそれをほおばりました。私たちは全部で数万はいましたが、それでも有り余るほどに大きなものでありました。

しかし、突如その薔薇のつぼみが開花し始めたのです。そして、なんと私たちが最も恐れるもの達に取り囲まれていたのです。奴等は無慈悲にそして残虐に私たちを殺します。奴等の仕業によって全滅した王国もあると聞いており、私たちも同じ運命を辿るのかと絶望しました。奴等は悪魔のような叫び声をあげていました。私には女神さまに助けを求めて祈るしかありませんでした。するとそのとき、不思議なことが起きました。薔薇の花が凄まじい速さで動き出したのです。わたしたちは振り落とされないよう必死でつかまりました。薔薇の花は奴等の作った七色に輝く不気味な装飾を木っ端微塵に打ち砕き、次の瞬間、私たちは大空を飛んでいたのです。女神さまが助けてくださったのでしょう。薔薇の花は花びらを回転させながら大空をゆるやかに滑空し、広大な草原の真ん中に軟着陸しました。私たちは薔薇の花を降りて喜び踊りました。王国への帰り道はすぐに分かりましたので、そのお菓子の家を皆で力を合わせて王国へ運びました。王国に残った人も多くおり、皆でそのお菓子の家を分かち合い、心行くまで味わい楽しみました。

本当に、あの日は私たちにとって忘れられない日でありました。

あの日は私たちにとって忘れられない日でした。

あの日は私たちの結婚披露宴あったのです。夫と共に多くの準備をしました。たくさんの友達を呼びました。そして、最高の思い出になるだろうと期待していたのです。そんな中の出来事でした。

ウェディングケーキ入刀の時です。私はありきたりでは嫌だったので、一味違ったものにしました。私は小さい頃から童話「お菓子の家」が大好きでした。また、薔薇の花が好きで、特に白とピンクのが大のお気に入りでした。そこで、ウェディングケーキをお菓子の家にして、大きな白桃色の薔薇の花を作り、それで包むことを思いついたのです。夫もそれに同意してくれました。予定では薔薇の花を閉じている金のリボンの蝶結びを解くと、花びらが回転しながら優雅に開花し、豪勢なお菓子の家が現れるはずでした。しかし、その時出てきたのは、蟻の大群に覆われて蠢くまっ黒な家だったのです。

ウェディングケーキ入刀の場面を撮ろうと多くの人が前に来て賑やかにしていましたが、蠢く黒い家が現れた瞬間、その場が静まり返りました。私は、その場の静けさとバックグラウンドミュージックのパッヘルベルのカノンが流れていたことしか覚えていません。その後に私が気付いたのは病院のベッドの上でした。

夫の話では、私たちは二人でケーキ用のナイフを持って待機していましたが、蟻の大群が現れた時、場の一瞬の静けさの後、私が絞められた禿げタカのような叫び声を挙げて狂乱したそうです。夫は危険を察してナイフを私から取り上げました。それは賢明な判断でしたでしょう。もし取り上げていなかったら何人かを刺していたでしょうから。私は目を血走らせてその薔薇の花をむんずと抱えるとハンマー投げのように五、六回回転して投げ飛ばしたそうです。薔薇の花は凄まじい勢いで教会堂のステンドグラスを突き破り、太陽の光を反射して七色に輝くガラスの破片の中、大空へ高く高く飛んでいったそうです。そしてその直後、私は気絶したそうです。その後、会場には救急車や警察などが来て大変な騒ぎだったようで、夫には本当に迷惑をかけました。ちなみに、披露宴は一週間の延期になりました。

今となっては笑い話ですが、今でも蟻はトラウマです。自然番組の蟻の大群を見るとあのまっ黒に蠢く家が思い出されてぞっとしますし、たまに夢にも出てきます。

本当に、あの日は私たちにとって忘れられない日でした。

実験計画書

[目的]

ソフトキャンディの一種であり、また口唇の代替物質としても利用されるマシュマロを合成し、その特性を評価する。

[試薬]

- 蔗糖　150 [g]
- 麦芽糖　20 [g]
- 水　60 [mL]
- 卵白　70 [g]
- 板ゼラチン　15 [g]
- デンプン　30 [g]

[器具]

- ビーカー
- トレイ
- 温度計
- 包丁
- 型

[操作]

① ビーカーに水を適量入れ、板ゼラチンを浸して約5分間ほど放置し、十分に吸水させる。

② 別のビーカーに卵白70 [g]を入れ攪拌する。このとき、空気を含ませるようにする。

③ 蔗糖150 [g]、麦芽糖20 [g]、水60 [mL]の混合溶液を用意し、温度計を用いて120度になるまで加熱する。

④ ②に、③の加熱した溶液を、攪拌しつつ少しずつ加える。加え終わったら、熱の残っているうちに、①の板ゼラチンを水分を除いてから加える。

⑤ トレイにデンプンを敷き詰める。このとき、デンプンの密度に偏りがないように注意する。

⑥ 敷き詰めたデンプンの上に、④のコロイド溶液を滴下する。滴下したコロイド溶液の形状は任意でよい。滴下し終わったら、冷蔵庫で1~2時間ほど冷却する。

⑦ 凝固物を、包丁や型を用い成型する。

⑧ 合成したマシュマロを、口径摂取により評価する。

⑨ 余力のある者は、マシュマロを自身の口唇に押し当て、実際の口唇の感触と比較する。また、異性交遊中に、視界を封じた相手の口唇にマシュマロを押し当て、相手の反応を観察する。

四人の聖夜

「冬樹は今日が何の日か覚えてくれてる…よね？」
今日、2月15日はこの二人だけの聖夜（バレンタイン）であった。
全国の男女が心ときめかすのは2月14日。しかしその日に渡すのを弟の冬樹が嫌ったため、秋子は毎年次の日にチョコをあげていた。
「でも…それも今年で終わりだけどね…。」
姉の秋子は聞こえないように呟いた。当の冬樹は顔を真っ赤にして壁のカレンダーを見つめている。しかしカレンダーには2月の1日から14日までの日付に大きくバツがつけられ、15日には丸がぐるぐると書かれていることに気付くと、冬樹は顔をもっと赤くして、今度はあわてて窓の外の雨粒を見始めた。
秋子はそれを見て嬉しそうにくすりと笑うと、いたずらっ子のように目を輝かす。上目使いで冬樹をまじまじと見つめている。
そして、すっと目の前に小さな黒い筒を差し出した。
「はい。今年のプレゼント♪」
それは茶色くて、甘い口紅であった。
秋子はおもむろにそれを取り出し、扇情的に振ってみせた。冬樹が思わず目をそれに沿って泳がせたことを確認する。その蓋をさっと取り、くるくると柄をまわし、口元に添える。そして片目でちらっと冬樹を見つめた後、ゆっくりとそれを動かした。
「な、なにやってんだよ…」
「…それを女の子の口から言わせる気？」
秋子は眼を閉じてぐっと顎を上げた。腕を後ろに組み、お尻を横に振っている。冬樹に落ち着くことなんてもうできなかった。
「は・や・く♪」
その瞬間、冬樹の何かが音を立ててたち切れた。

それからの冬樹は狂っていた。欲望のゆくまま、唇の導くままに…
秋子の体を両腕で締め上げ、暴力的なまでにに食らいつく。
「そう…それでいいのよ…ふゆき…」
数分をかけて濃厚なキスを交わし、プレゼントを舐めあげる。
二人の息は時間をかけずに蒸気にかわり、互いの顔を火照らせた。
「あきねぇ…くぅ…おかわり…いいかな…」
「ん…はあっ……いいよ…なんかいでも…ちょうだ…」
　秋子の唇にまたあてがう。二人にはまた甘さが満ちた。
「ん………もういっかい…」
「んっ…おーだーはいりました……んんっ！」
二つは何度も、何度も重なりあった。時間はずっと止まっている。
「…も、もういっかい……」
「ん…だめ…おねえちゃん…もう…」
秋子は思わずその場に崩れおちるが、冬樹がそれを支えていた。
冬樹は姉を自身のベッドにそっと寝かせると口紅をまた姉の唇へとあてがった。しかし秋子はそれを手ではじく。
「ばか・ふゆきっ！まだそれがひつようなの！……んんっ」
答えとばかりに冬樹は唇を塞ぐ。二つの唇の間には別れをいとおしむかのようにつぅーっと白い糸がかかっている。
「あきねぇ…。おれ…あきねぇがちょこみたいに…
　　　　　こんなに甘くて…甘くて…」
「うふふ…いまごろきづいたの…？」
冬樹は顔をまるで苺ように真っ赤にしていう。
秋子は眼をとろんとさせて息を熱く、こう答えた
「ふゆき…おんなのこはね…
　　　　とっても…とっても甘い…いきものなのよ…」
そしておもむろに胸のボタンをひとつ外し、
冬樹の理性にとどめを刺した。
「おいで…おねえちゃんのもっと甘いとこ…
　　　　たべてみる…？」

*

明けきらない朝、消えようとする月の下、小鳥たちは鳴き始めるべき時刻を待ちわびていた。そんな鳴けない鳥たちの下、ベッドの横では二人の女性がほほを濡らしている。
「冬樹…あなたが…あなたが悪いんだから…。」
「美春だって…秋子と同じことしようとしてたくせに…。」
ベッドの上には満面の、しかし冷たく白い笑顔が二つ横たわっていた。
「ねえ、夏実。なんで毒をゆっくり効くものにしたの？」
「なんででしょうね。ただわたしは…」
使い切って欲しかったのかもね。そう言いかけて言うのをやめた。
美春は耳をふさいで夏実を制止したのである。
2月15日の誕生花は雛菊（ヒナギク）、花言葉は「純潔」である。
生れしものには純潔満ちるこの日。しかし、この家にはもうどこにも純潔など存在しないだろうことを、美春と夏実は知っていた。
「……美春、どうやら神様は、私たちの罪にお気づきのようよ。」
美春は振り返り、枯れた涙をもう一度流して頷いた。
そして二人はゆっくりと落ちていた口紅（プレゼント）を拾い上げ、化粧をし、濃密な口づけを交わし始める…

Last white day

今日は、三月十四日。五度目の、そして—最後のホワイトデイ。

彼に出遭ったのは中一の時、彼は、一つ上の先輩。

—私は彼に、恋をした。

彼の近くにいるだけで、心が私になったみたい。彼に会えないだけで、「わたし」が消えてしまったみたい。

素直になって、私の全てを伝えたかった。でも、今を手放す勇気が持てなくて。…だから、年に一度だけ。「義理」と言って彼に届けた

—過剰量の砂糖（あまいきもち）が詰まった、失敗作の手作り（わたしのこころ）チョコを。

お返しなんて期待もせずに、…やっぱりお返しなんてなくて。

だけど、でも、そんな日も今日で終わり。彼と一緒に居たくて、同じ高校までは来たけれど、彼の志は遥か高くて。『私じゃ不相応』、そんな、私らしくない言葉すら頭を過ぎる。

—そんなとき、電話が鳴った。

彼はいつものように、夕暮れの部室に居た。いつもと同じはずの、見慣れたはずの光景なのに。とくん、と 胸の高鳴りを感じた。

「俺は、ずっと考えていた、いや、先延ばしにしていたのかな。」

—夕日が、無表情に私たちを照らす。

「キミに、拒絶されるのが怖かった。でもきっと、今日は最後のチャンスなんだと思うんだ。…二ノ宮さん、俺は、ずっとキミの隣に居たい」

—重なる、私達の影。

最初のホワイトデイのお返しは、とても熱くて、蕩けるような

—チョコレートの三倍甘いくちづけ。

堕ちる実ふたつ

いつまでも止まない電話の呼び出し音が、まるでサイレンのように響いていた。

季節は冬で、時は夜で、なのに私たちの身体は溶けてしまいそうなくらい熱かった。

私が産まれた次の年に、達也は産まれた。そしてそれからというもの、私たちはずっと隣り合って生きてきた。同じ番組を観て、同じ音楽を聴いて、同じ本を読んで過ごした。小学校に上がり、さらに中学校に上がってからも、私たちはずっと一緒だった。他の姉弟がそうであるように、思春期を境に疎遠になってしまったりはしなかった。学校の休み時間までも二人だけで過ごしていたために、私も達也も友達と呼べるような人間は誰一人として持っていなかったが、それでも私たちは満足だった。ただ互いだけが世界の全てなのだということを、生まれながらに知っていたからだ。

居間に掛けられた壁時計の鐘が鳴り、シンデレラの魔法も解けたころ、私と達也はなにひとつ喋らないまま同じ布団に入る。冬の夜気にあてられたその布地は、私たちを飲み込んでなお冷やかさを失わずにいた。そのまま静かに目を閉じていると、隣室で響いていたテレビの音が消え、辺りに静寂が満ちる。そしてさらに半時間ほどが過ぎたころ、達也の右手が布団の脇に垂れた電気のスイッチへとのび、部屋は唐突に暗転する。夜景の明かりすら厚いカーテンに遮られた部屋のなか、存在しているのは二人の呼吸音だけだった。

達也の吐息が首筋をくすぐり、やがて途絶えた。代わりに湿った感触が優しく頬へと流れていく。そして、無意識のうちに声をあげそうになった私の口を、達也はそっとふさいだ。達也の舌は融けた鉄のように熱くて、そしてひどく甘かった。

私たちの暮らす家の庭には小さな柿の木が植えてあって、毎年十数個の実をつける。けれど、そのうち収穫できるのはほんの数個だけで、あとは野鳥に食べられてしまうか、熟れすぎて食べるより先に腐り落ちてしまう。特に枝の先のほうに隣り合って膨らんでしまった実は、その互いの接触面からすぐに甘く熟れてしまい、他の実がまだ固いうちに地面へと落ちてしまうものだ。今年の秋も、ベランダから一番近い枝に連なってなってしまった二つの実が、まだ残暑も抜けきらないうちに落ちてしまっていた。ぐしゃぐしゃに潰れた二つの果実は、不快なほどに甘ったるい臭いを、いつまでも振りまいていた。

腐っていく。その自覚はある。

周囲の同級生たちは、まだ瑞々しい青い香りに包まれているというのに、私たちはもうこんなに甘くただれている。

達也が息を吐く。私が息を吐く。二人の呼吸がシンクロして、部屋中が一定のリズムできしみをあげる。私と達也は、何度も身体の位置を交代しながら、声を押し殺してただただ荒く息を吐く。隣室で眠る両親のことなど、もう頭の隅にも浮かびはしない。暗い夜、世界の果てで、二人だけがすべてだった。

いつのまにか呼び出し音が止んだ部屋のなか、真綿のように白いティッシュで、私たちは互いの身体を清めあう。けれど、どんなにたくさんのティッシュを使い捨てたところで、隣り合う私たちから立ちのぼるこの甘い香りは消えやしない。

私たちは理解している。本来必要なはずの予防を、私たちはなにひとつおこなっていない。義務教育も終えていない私たちにとって、予防のための道具を定期的に調達するなんてことは、とてもではないが不可能だった。だからおそらく、もうそう遠くない未来に、私たちは破滅を迎えるだろう。

けれど、それは運命なのだ。甘く腐ったふたつの果実は、すぐに地面へと堕ちてしまう。

それが、隣り合って産まれたものの運命なのだ。

ネタかぶり2

色

僕の両親は仲が悪かった。見合いにより知り合った二人であるが、父は両親の薦めにより、母は年齢的な焦りにより結婚したらしく、そもそも互いを好いていたわけではなかった。そんな二人が結婚し同じ空間にいて気があうわけもなく、現在の状態に至る。二人共僕に対しては優しかったが、俺の方が息子を愛している、私の方が息子を大事にしている、という競い合いに感じられ、本当に愛されているなどという実感を味わったことはなかった。

しかし、こんな状況の中でも唯一の救いがあった。妹だ。妹だけはいつも笑顔で僕の傍にいてくれた。辛い時は慰めてくれて、壊れてしまいそうな時は抱きしめてくれた。そんな妹が僕は好きだった。それはもはや「妹」としてだけでなく。

そんなある日、僕は妹を求めしまった。妹を何よりも傍に感じたくて、僕は一人じゃないと感じたくて。妹はそれに何も言わず応じてくれた。まだ幼さを残す身体で一身に受け止めてくれた。妹はとても甘い味がした。初めて心が満たされた気がした。それから僕らは毎日肌を重ねた。これがタブーな行為であるとは知りつつも、止めることができなかった。その短い時間には至福しかなく、今まで得られなかった何かがその時間にはあった。

けれど、そんな時間も長くは続かなかった。二人だけの秘密で隠していたつもりだったが、両親に知られてしまった。お前がしっかりしないから、あなたがちゃんとしないから。家族会議は僕ら二人そっちのけで、両親の罵声だけが飛び交った。僕は黙っていた。妹も黙っていた。僕らにはそれしかできなかった。その場に居続けるだけで精一杯だった。

程なくして両親の離婚が決まった。妹は母に連れられ長崎の母の実家に、僕は父と共に東京に残った。結局僕らはあれから何も言えないまま全てが決まった。後ろめたさが身体に絡みつき、言葉を発する自由を奪われていた。

それからの日々には色がなかった。全てがモノクロで、輝きなどなく。決められたことをし、ただ時だけが流れ。僕は地元の大学に進学したが、そこでも色はなかった。父は酒に溺れ、仕事もせず、何もせず、堕落していた。

いつものように大学が終わり、僕はモノクロの景色の中を歩いていた。希望や救いを求めることはいつしかなくなり、自我がどこにあるのかさえわからなくなっていた。何も考えず、何も思わずしばらく歩き、いつもと同じく家の前についた。しかし、普段ならここも他と同じくモノクロの空間のはずなのに、今日は色づいた何かがあった。白と黒以外の、色。家の前のある一部分が色で満たされていた。それは甘い色をしており、僕の何もかもの行動を奪った。そして、その正体は紛れもなく、妹であった。

僕は妹を家に上げた。父に見つかればただ事では済まないだろうが、今の父はもはや人として機能しておらず、その心配はなかった。僕は妹を昔二人が過ごしていた部屋に入れた。今この部屋は物置になっており、僕は別の部屋に住んでいた。当たり前のものが消えたこの部屋で、一人で過ごせるはずもなく。長い間の沈黙の後、妹は口を開いた。地元の高校に進学したこと、バイトをして生計を立てていること、そして、母も同じくまともな人間ではなくなってしまったこと。僕もそれに続いて色々話した。妹は相変わらず僕の知っている妹のままで、どこか懐かしく、どこか甘く。そしてやっぱり、僕は妹を好きでいたままだった。いつしか僕らは、肌を重ねていた。

妹はその日のうちに長崎に戻った。結局世の中で子供が何を言おうとそれは無力で。だから僕らは約束した。大人になったら二人で過ごそうと。他の誰が認めなくとも、愛し合っていこうと。相変わらず世界に色が戻ることはなかったが、僕は初めて未来を考えた。今までは妹に支えてきてもらったが、これからは僕が支える番だ、と。

コンテスト結果

コラム番号	コラムタイトル	点数	順位	特別賞
		まじょコメント		
01	別にうらやましくなんか…	1 pt	6 位	1 sp
		ベタ甘が予想される今週、さわやかなマシュマロ君の登場で始まります。 　「ありのままの僕で十分」なんて、いいキャラしてるなあ。背伸び感が、かわいい。 　着地がもうひといきか。 特別賞：電子レンジに入れてやりま賞 by Desert班(望み通り形を変えてやろう） イチオシフレーズ：「マロの独り言」		
02	苦さの中に	0 pt	8 位	0 sp
		まさかの「バイバイ！」。あまりに唐突で呆然とするばかり。もうちょっと伏線置かないと、暗闇に一筋、という希望の感じが出てこないのでは。 　TAさんたち、15人の中に彼女も存在していたのか否かで真剣に議論してましたよ。 　何はともあれ、おだいじに。		
03	西印度諸島視察記	12 pt	3 位	0 sp
		同じ光景なのに、あるきっかけで全く逆転して見えてしまう。そのことを緻密に丹念に、奴隷根性のありよう、という立脚点から展開していただきました。 　奴隷そのものでなく、奴隷監督の視線に焦点を当てた工夫が光ります。込められた思想の「甘くなさ」では、今週の作品で随一でしたね。 おめでとう、ブロンズ・メダル！ イチオシフレーズ：「すてぃーぶんす」		
04	いたずらに……	1 pt	6 位	1 sp

		はい、お約束の後日談到着♪ いい友だちだね、と褒めるべきか否か。「恋愛事情を元カノに話すってどうよ」と、とある班からツッコミが……　さすがに、さらなる後日談はないんだそうで。 特別賞：おやすみ（はあと）賞（そろそろ寝るね） by 糖分班 イチオシフレーズ：「おやすみ（はあと）」　「不意打ちのハートマークにささやかな笑みを浮かべて」
		15 pt　1 位　0 sp
05	石井小刀甘い	語呂悪いって。この作者さんらしくもない。その謎かけ部分に不満が残りますけれど、まあもう、文体のはまり具合はさすが。 扱いのむずかしい時代小説文体をみごとに自家薬籠中のものにしていて、そのあたりがマウンテンの勢いや、すてぃーぶんすの思想性を、僅差でかわせた勝因だったでしょうか。 おめでとう首位。次こそは鮮やかな勝利者スピーチをぜひ。 イチオシフレーズ：「ぶべらっ！」
		0 pt　8 位　2 sp
06	でぶについて	「ドアにでもつっかえてろ！」が笑えました。威勢の良い啖呵、ふむふむと気持ちよく読めたのに、ラストで急におとなしくなってしまうところがちょっと肩透かしだったか。 特別賞：ぽっちゃり賞 by アポロチョコ班（ぽっちゃりはステータスだと思う）　/　メタボリック賞候群 by I love sweets班(激励に感動) イチオシフレーズ：「脂肪で死亡」
		13 pt　2 位　0 sp
07	世界一のスイーツ	トンデモ設定の破壊力、なかなか。キンジンなんて、良く調べたなあ。 マウンテンのホームページと合わせてご賞味いただくと、よりずし～んと胃もたれ致しますので、どうぞおためしあれ。 スイーツ激戦を制しての銀メダル、おめでとう!! イチオシフレーズ：「甘口抹茶小倉スパダブルも存在するだと？」
		10 pt　4 位　0 sp

08	二つの思い出		わあおぎっしり。この見た目で、蟻のうじゃうじゃ感を出したかったのでしょうか。うぎゃあ。 　今週の進行渋滞を引き起こした一番の元凶作品だけれど、まあ読めば読んだ甲斐のある力作ではあります。ストーリーの練り込み、そして、空飛ぶ薔薇の花の爆笑映像、文句なしでした。スリム化して、より上位を狙ってくださいまし。
09	実験計画書	8 pt / 5 位 / 3 sp	敢えて坦々と。そのぶっきらぼうが味わい。 　だから、ラストのオチが引き立つわけで。 　そんなスタンスが評価されて、今週の最多特別賞でした、おめでとう。 特別賞：レポートの〆切来週で賞 by　まんじゅう９個班 / 余力が欲しいで賞 by Chocolate班 / (笑）by 甘（H)班 イチオシフレーズ：「異性交遊中」
10	四人の聖夜	0 pt / 8 位 / 2 sp	甘い甘い死のくちづけ。おぉ、いきなり人が増えたと驚いた終盤で、どさどさ死体の山。 　まったくもう、何がしたかったんでしょうね、作者さんてば。 特別賞：弟賞 by 甘班(色々な意味で凄かった）　/　こんなこと書いていいで賞か？ by 焼きたてJapan班（エロす）
11	Last white day	0 pt / 8 位 / 1 sp	べったべただった今週、ラストはせめて軽やかに。 　うーん、これねえ、純愛？　じゃないよね。 　こんな色男に引っかかっちゃあいけませんよ、二ノ宮さん……と読んでしまいました。だめ？ 特別賞：心が私になったで賞 by Good byeバレンタインもう来るなよ班（もう袋叩きです） イチオシフレーズ：「過剰量の砂糖が詰まった、失敗作の手作りチョコを」「心が私になったみたい」
		0 pt / 8 位 / 0 sp	

12	堕ちる実ふたつ	うわあ熟柿。べたべた〜。 赤い柿に白いティッシュに、と色の配し方のうまさと、電話の音という効果音と。 そんな演出も行き届いて、ひたすら「腐っていく」を表現した作者さんのねちっこさに脱帽。 きっとね、お父さんお母さん気づいてても、恐くて何も言えないんだ、あなおそろしや。
13	色	0 pt / 8 位 / 0 sp 類は友を呼んじゃったね。こちらも、すさまじい状況をパワフルに描ききって大インパクトでした。親の壊れよう、同じ部屋を使わない、など細部のていねいな仕上げが重量級ドラマをしっかり支えています。 さてさて、あなたはオモテとウラ、どちらがお好みでしょうか。 おふたりの作者さん、これも何かの御縁です、末永く仲良くどうぞ。